9月25日（日）14:10／304教室 01史－25－①－07

1936-1959年のIOCにおけるオリンピック大会への女性の参加問題をめぐる議論—IOC総会および理事会議事録の検討を中心に—

○東田 孝子（中京大学）

本研究は、オリンピック大会への女性の参加問題をめぐりIOC内部でなされた議論について検討するものである。本報告では、1935年2月25日-3月1日にオスロで開催されたIOC総会前夜、1959年3月25-28日ミュンヘンで開催されたIOC総会内の総会および理事会議事録を検討の対象とした。この期間は、オリンピック大会への女子陸上競技種目採用に関する国際女子スポーツ連盟（FSFI）とIOCおよび国際陸上競技連盟（IAAF）の議論がFSFIの消滅ないし解散を含むながら収束に向けた時期から、第二次世界大戦をはさみ、IOC会長が前記のFSFIとの議論の際にはIAAF会長であったJ.エドストーロム（第4代）、A.ブランデージ（第5代）へと移行した時期にあたる。先行研究では陸上競技以外の女子競技・種目の大会採用年は明らかにされているが、採用に関する議論の詳細はほとんどみられない。検討の結果、陸上競技、体操競技、馬術等いくつかの競技に関する議論が存在し、その背景には女性の権利をめぐる国際世論等の社会情勢の他、オリンピック規則の解釈や大会の規模をめぐるIOC独自の課題も明らかになった。

9月25日（日）14:35／304教室 01史－25－①－08

「1940年幻の東京オリンピック」に向けた対アジアのスポーツ外交

○田原 浩子（国土舘大学）

1936年7月に開催されたIOC総会で、東京が1940年第12回オリンピック競技大会の招致に成功したとき、アジア諸国からの票の獲得が大きく作用したことが明らかになった。翌1937年7月、日本は中国との本格的な戦争に突入し、そのオリンピック競技大会の返上を余儀なくされたことは周知のことである。今日でも、日本にとってアジア諸国との関係を良好に保つことは重要である。スポーツや国際的なスポーツ大会が果たす社会的な役割やそれへの期待がますます大きくなる中で、アジア諸国とのスポーツ交流の歴史に目を向けてみることは意味があると思われる。

本発表では、外務省外交史料館所蔵文書を中心に、現在のアジアオリンピック評議会（OCA, Olympic Council of Asia）加盟国-地域を対象に昭和の戦前期における日本とのスポーツ交流を検討し、「1940年幻の東京オリンピック」に至る日本の対アジアスポーツ外交の歩みを明らかにする。

9月25日（日）15:00／304教室 01史－25－①－09

活動フィルム「日本のテニス」（昭和8年）作製の経緯

○後藤 光将（明治大学政治経済学部）

昭和8年、日本庭球協会は、活動フィルム「日本のテニス」を作製した。同年的昭和7年に作製計画が立ち上がった。計画書には、「硬球全囲普及の必要を兼ねて日本以外のテニスクラブ・プレイヤーや試合場の活発な展開を撮影し今後の記録、初歩者へのテニス技術紹介を必要とするの要求に基づき･･･」と目的が記されている。撮影内容は、「(1)庭球協会より派遣させるディベースククラブ・プレイヤー・熊谷、清水、原田他の諸氏のフォーム及び各種要の技術の高速度分級映写の撮影、(2)総合スコーチのアドバイス。(3)硬球初歩者に対するコーチの指導、(4)庭球協会の特別会員の活動の一部。しかししながら、実際に作製されたフィルムは、チキープ化ではなく、無声版であった。

本研究は、フィルム作製の経緯を整理することを通じて、上記の計画変更の背景を探ることを目的とした。対象資料は、日本庭球協会発表の書簡を用いた。これらの交信資料から、応用が予定した額を下回ったことが大きな原因であったことが明らかとなった。